

特集：MAZDA CX-30

02

## MAZDA CX-30 のデザイン Design of Mazda CX-30

柳澤 亮<sup>\*1</sup>  
Ryo Yanagisawa

### 要 約

全く新しいコンパクト・クロスオーバー SUVとして誕生したCX-30は、日本の美意識を礎とし深化したマツダのデザイン・テーマ『魂動（こどう）—SOUL of MOTION』を採用した新世代商品の第2弾である。「引き算の美学」のもと、研ぎ澄まされた強い生命感を表現した。

多くのお客様に支持されるよう高い実用性を持ちながらも、「世界で最も美しいクロスオーバー SUV」というあい反する高い目標を掲げ、課題のブレークスルーによりそれらを高い次元で両立した。デザイン・コンセプトは『Sleek & Bold』（スリーク・アンド・ボールド）とし、伸びやかな美しさと、SUVらしい力強さが融合したプロポーションを創造した。

室内は『人馬一体』・人間中心の思想と、日本の伝統的な建築にも見られる「間」の考え方にに基づき、ドライバー・コックピットの「包まれ感」と、助手席の「抜け感」を対比させた。また細部に至る徹底的な創り込みによる高い質感に加え、内装色は4つのコーディネートにより、お客さまの歓びとライフ・スタイルをサポートする。

### Summary

Mazda CX-30, which is an entirely new entrant in the compact crossover SUV category, is the second model in Mazda's new-generation product lineup to feature the further-matured Kodo – Soul of Motion design concept, a concept rooted in traditional Japanese aesthetics. Inspired by the 'aesthetics of subtraction', an approach that lets beauty emerge by reducing elements rather than adding new ones, CX-30 has achieved styling with a finely-honed, powerful sense of dynamism.

CX-30's styling has raised the car design to a higher level to satisfy two contradictory demands: the enhanced utility to win over a broad range of customers and the 'world's most beautiful crossover SUV' as a work of art. Based on the 'Sleek & Bold' design concept, its proportions combine the toughness of an SUV with a supple, flowing beauty that transcends the category.

Design of CX-30's cabin is based on Mazda's 'Jinba-Ittai', human-centered design philosophy and traditional Japanese architecture with its use of Ma or empty space. The basic layout revolves around two areas with contrasting characteristics: a snug and condensed cockpit area for the driver, and a clean, airy open space around the front passenger. In addition to a genuinely refined, top-quality interior space achieved by great attention paid to every detail for improved fit and finish, four interior color schemes are offered to bring joy to customers and suit their different lifestyles.

**Key words** : Vehicle development, Design, Exterior/Interior, Color, Kodo

### 1. はじめに

CX-30は、近年成長著しいコンパクト・クロスオーバー SUV市場における、マツダの全く新しい商品として開発した。私達が目指したのは、世界で最も美しいクロ

スオーバー SUVである。日本の美意識を礎とし深化した『魂動デザイン』を採用した新世代商品の第2弾であり、『Car as Art』（クルマはアート）と呼べる高い次元の芸術性を追求した。通常ならこれとあい反するはずの居住性や荷室容積などにも一切の妥協をすることなく美しいブ

\*1 デザイン本部  
Design Div.

ロケーションを実現すべく、デザイナーとエンジニアの垣根を超えブレークスルーを目指し、チーム一丸となって創り上げた。その流れるようなフォルムや心地よく質感高いインテリアは、見る者が息をのむアート作品のような、類い稀な美しさを表現した。

お客様の感性がこのクルマの美しさに共鳴し、より創造的な自分になることで、アートと毎日とともに過ごす豊かな人生を送って欲しいと考えた。

## 2. デザイン・コンセプト

### 2.1 深化した魂動デザイン

2010年から始まったマツダのデザイン・テーマ『魂動』は、ブランド価値を向上させる大きな原動力となった。そして2017年のコンセプトカーVISION COUPEでは、魂動デザインをアートのレベルに引き上げるべく更に深化させ、新たなステージへと踏み出した。深化した魂動デザインが目指すのは、日本の美意識を礎とした新たなエレガンスである。「引き算の美学」のもとに、一筋の強い動きである「反り」、余計な要素を削ぎ落とした「余白」、光りと影のゆらめきを映し込む「移ろい」の3つの要素で、より自然な生命感を表現した (Fig. 1)。



Fig. 1 Three Factors of Japanese Beauty

### 2.2 デザイン・コンセプト『Sleek & Bold』

この考え方のもと、コンパクト・クロスオーバー SUV としての新たなデザインを創造したのが CX-30 である。『Sleek & Bold』をデザイン・コンセプトとし、伸びやかな美しさと SUVらしい力強さが融合したプロポーション、一瞬ごとに変化する豊かな表情を見せるボディサーフェース、包まれ感と抜け感が鮮やかに対比し全ての乗員が一体感と居心地のよさを感じられる上質なインテリアを創造した。これらにより、見るたび触れるたびに感性が刺激される、このクルマならではの価値と個性を磨き上げた。

## 3. エクステリア・デザイン

### 3.1 パッケージとプロポーションのブレークスルー

CX-30 は居住性などのパッケージを一切妥協すること無く、伸びやかな美しさを追求するという高い目標を掲

げた。しかしこのクラスのクロスオーバー SUV は、全長が短く背が高いクルマゆえにずんぐりとしたプロポーションになってしまうため、伸びやかに見せることは極めて困難であった。しかし何としてでも克服しようとチャレンジし、3つのブレークスルーによりそれを果たした。

- ① ボディー下部を幅広の黒いクラディング（樹脂ガーニッシュ）でブラック・アウトすることで、残ったボディー・カラー部がスリムで伸びやかに見える視覚的効果をねらった。同時にクラディングによって SUVらしい力強さと安心感も表現 (Fig. 2)。
- ② 後席の頭上空間を確保したまま Dピラーを寝かせることによる、居住性とクーペのような流麗さを両立したキャビン (Fig. 3)。
- ③ キャビンから一気に張り出すリア・フェンダーと、妖艶で幅広いくびれの造形によるワイド・スタンスでスポーティーな後ろ姿 (Fig. 4)。



Fig. 2 Slim Body Proportion



Fig. 3 Roomy and Fast Cabin



Fig. 4 Wide Stance from Back View

これらをまとめたデザイン・コンセプトを『Sleek & Bold』とし、伸びやかなクーペの美しさと、大胆な SUV の力強さを併せ持ったデザインとした。

### 3.2 デザイン・テーマ「溜めと払い」

深化した魂動デザインの要素である「余白」「反り」「移ろい」のもとに、ボディー全体で前進感を表現するた

め、書道の筆づかひの動きである「溜めと払い」をCX-30の造形テーマに規定した。これはノーズからフロント・フェンダーにかけて溜めたエネルギーを、後方に向けて拡散して前進する動きである (Fig. 5)。



Fig. 5 Design Theme “Charge and Release”

ボディー面は明確な折れ線を使わず柔らかな面の表情のみでこの動きを構成し、クルマの動きとともに周囲の景色がS字型に揺らめきながら映り込む「移ろい」を表現した。このようにCX-30は、アートとしての美しさと生命感を感じさせるデザインを創生した。

一方でS字型の映り込みの実現は困難を極めた。このためにはフロントドア前端の面を上向きに傾けることが必要になるが、ここに収められているドアヒンジを傾けることはドアの開閉性能の悪化につながる。そこでエンジニアにこのねらいを説明し腹落ちしてもらうことで共創活動につなげた。開閉性能を犠牲にせず、構造の見直しや隙を限界まで詰めることで、この魅力的な映り込みを実現している。

また、この「移ろい」の表情には極めて微細な面の変化が必要であり、量産に当たってはそれを表現し切るだけの極めて精細な鉄板面・樹脂面の加工精度が求められる。MAZDA3の開発でエンジニアと工場メンバー、サプライヤー様らが自ら取り組んだ「面のアーティスト活動」を進化改善し共創することで、鉄板や樹脂の成型歪みの問題を克服し、更なる高い精度の美しいボディー、ドア、バンパーなどを産み出した (Fig. 6)。

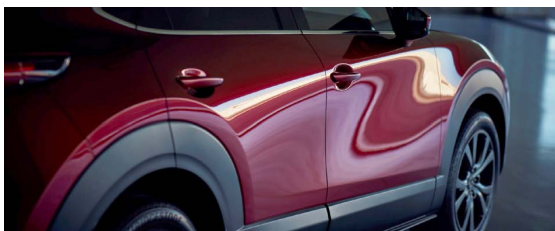


Fig. 6 Body Surface

### 3.3 エレメント・デザイン

フロント・エンドはマツダのファミリーフェイスを踏襲しつつ、端正で精悍な表情を創った。それ自体が彫刻作品であるかのように、より鋭く深い造形に進化したシグネチャー・ウイング (ラジエーター・グリル外周の縁取り) により、強い前進感を表現した。三角形のブロックを交互に上下反転させて配置したラジエーター・グリルは、見る角度や光の当たり方によってさまざまな表情の移ろいを見せるよう工夫した。

前後のランプは、ともに極限まで薄くデザインし、精緻に造り込んだシリンダー形状が際立つ発光表現と相まって、アート・ピースとしての美しさと、マシンとしてのメカニカル感を表現した (Fig. 7)。



Fig. 7 Front and Rear Details

また瞬時に点灯したのち、余韻を残すかのように徐々に消えていくディミング・ターン・シグナル (光源: LED) を新たに開発した。拍動を感じさせる温かみのある点滅によって、マツダらしい生命感を表現している。この発光表現はサプライヤー様や社内エンジニアとの共創により、LEDの調光制御を開発し実現に漕ぎつけた。ターンシグナル作動時のメーター内のインジケーターと作動音も同様のリズムで点滅・鳴動するようチューニングを施し、心地よい統一感を造り込んだ。

アルミホイールではセンター部の強い凝縮感と、外側へと広がるスポークのコントラストによって、しっかりとボディーを支える力強さを表現した。

### 3.4 空力性能

新世代商品群では卓越した空力性能に取り組んだ。空力の改善は燃費性能、すなわち世界的に重要なCO2削減につながるのみならず、操縦安定性の改善によりマツダの目指す『走る歓び』にも直結するからである。ただし空力を優先する余りデザインを悪化させる訳には行かないため、エンジニアと共創し高い空力性能と美しいデザインの両立のためのブレークスルーにチャレンジした。一例として二重のエアカーテンをもつフロントタイヤ・ディフレクターは、まさに二人三脚とも言える共創の成



果であり、特許取得につながった。

これらの結果、CX-30はクラス・トップレベルの高い空力性能と、『人馬一体』の走りを実現した。

## 4. インテリア・デザイン

### 4.1 包まれ感と抜け感を対比させた「間(ま)」の空間

CX-30のインテリアは、『人馬一体』・人間中心の思想と、日本の伝統的な建築にも見られる「間」の考えに基づいて創り上げている。凝縮されたドライバー・コックピットの「包まれ感」と、すっきりとした助手席の「抜け感」を対比させた空間を基本とした。このように『Sleek & Bold』のデザイン・コンセプトのもと、伸びやかな美しさとSUVの大胆さが同居したインテリアを実現した。また上質で豊かな空間を創り上げるため、素材や仕立てなどのクラフトマンシップも追求している。

### 4.2 コックピット・デザイン

コックピットはドライバーを中心に完全に左右対称のレイアウトや造形とするとともに、3つの各メーターやセンター・ディスプレイをドライバーに向けて角度を持たせることで、クルマとの一体感と対話のしやすさを強め、運転に集中できる室内環境を整えた (Fig. 8)。



Fig. 8 Driver Cockpit

前席空間は、メーター・フードを起点に助手席側のドアトリムまで美しくカーブを描くウイング状のフード造形をテーマとした。凝縮感のあるコックピットに対する抜け感を表現するとともに、視覚的な広がりによるすっきりとした居心地のよさを演出している。更には前席乗員を翼で大きく包み込むようなフード・デザインとすることによって、安心感をも提供する。またウイングの縁部分にあしらったステッチや末端部の金属加飾により、インテリア全体の上質さを引き立てた (Fig. 9)。



Fig. 9 Front Passenger Space

### 4.3 フロント・コンソール

ワイドなフロント・コンソールは、操作部を集約した前方のメカニカルなシフト・パネルと、伸びやかでしなやかにキックアップするパッド部の柔らかな表情が、美しく対比したデザインとした。

シフト・パネルには、MAZDA3で導入したバイオエンジニアリングプラスチックの2層成形技術を更に進化させて採用した。上層の深みのあるスモーク・グレーのパネルに光が当たると、下層のパネルに刻まれたメカニカルな金属調のパターンが出現するように、スモークの明度やパターンを吟味した。このように光の移ろいで表情を変化させることによって、上質感と先鋭感を表現した (Fig. 10)。



Fig. 10 Front Console

### 4.4 インテリア・カラー

内装色は、シックな大人の世界を醸し出すリッチ・ブラウンと、モダンで知的な世界を演出するネイビー・ブルーの2色をラインナップした。それぞれに明るいシートとブラックのシートを組み合わせる4つのカラー・コーディネートで、お客様のライフ・スタイルをサポートする。

#### a. リッチ・ブラウン内装

ブラックまたはピュア・ホワイトの本革シートを設定。

ブラックのシートには、パーフォレーションの穴の断面にアクセント・カラーとしてブラウンをあしらい、上質感を表現した。

#### b. ネイビー・ブルー内装

布シートと合皮シートの2種類を設定。どちらのシートにも、グレージュまたはブラックを用意した。

このネイビー・ブルー内装、グレージュのシートと、ポリメタルグレーメタリックのボディー・カラーの組み合わせにより、JAFCA主催による「オートカラーアワード 2019」グランプリを MAZDA3 とともに受賞した (Fig. 11)。

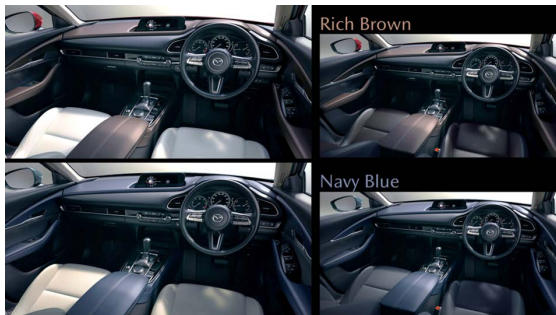


Fig. 11 Interior Color

## 5. 『人と共に創る』

CX-30 のデザインを支えたのは『人と共に創る』マツダの企業風土である。居住性とプロポーションの両立、ドアの映り込みの実現とそのクオリティ、デザインと空力性能の両立、ディミング・ターン・シグナルの実現、シフト・パネルの表現など、ここには書ききれないありとあらゆる領域で、エンジニア、サプライヤー様、デザイナーの垣根を越えて共創を重ねてきた。それを可能にしたのは、腹に落ちるまでお互いを理解し合い、お客様とマツダにとって正しいと信じることをやるという各々の姿勢であり、広島の地に育てていただいた企業風土であったと言える。

## 6. おわりに

新世代商品の第1弾として先行した MAZDA3 が、デザインに特化した個性の強い商品にシフトしたのを受け、CX-30 はより多くのお客様に支持される商品とする必要があった。そのために居住性などの機能を最良の物としつつも、それと同時に最高に美しいスタイリングを両立したいとの強い想いがあった。チーム一丸となって取り組みブレークスルーを果たした結果、「2020 ワールド・カー・オブ・ザ・イヤー」トップ3、独「ゴールデン・ステアリングホイール賞」コンパクト SUV 部門、独「2020 年レッド・ドット賞」プロダクト・デザイン部門、独 AUTO ZEITUNG 誌「デザイン・トロフィー 2020」チャンピオン・オブ・オールクラス、そして先述

の JAFCA 「オートカラーアワード 2019」グランプリなど、数々の賞\* を頂くことができた。それもまた各国の販売も好調であるが、お客様からお褒めの言葉や歓びの声を頂くことが何にも増してありがたく、嬉しいと感じる。

CX-30 は登場して日も浅く、まだまだ無名に近いクルマではあるが、今後もより多くのお客様の日々の暮らしに豊かな彩りを与えられる存在として大きく育てて行ってくれたなら、私達創り手にとって何よりの喜びである。

(\*受賞歴：2020年6月時点。マツダ調べ。)

#### ■ 著 者 ■



柳澤 亮